

1. 単元名 「読書の世界を深めよう」

2. 教材名 「森へ」

3. 教材について

「森へ」は物語でもなく説明文でもない。どちらかという、事実に基づいてかかれているので説明文に近いが、筆者の強烈な感動があちこちに書きつづられているため、説明文とは全く違う趣を持つ。また、何と言っても写真が美しい。丸ごと写真を使ったページが何カ所もある。写真と文で、美しい風景を想像しながら読み進めていく作品である。だから、じっくりと読み味わうのに適している。読書単元の入り口として位置づけられているのは、まさに適当と思われる。

しかしながら、このような豊かな自然を豊かな情景描写で書いたとしても、読み手に想像力がなかったとしたら、何の魅力もない作品となるに違いない。また、自然の美しさや豊かさを全く体験したことがなかったとしたら、想像力も働かないに違いない。だから、読み手の器によって、「すばらしい。」と感ずるか「つまらない。」と感ずるか、そのどちらかになるような気がする。

「森へ」のテーマは何か。それは自然の美しさ豊かさ楽しさ厳しさであろう。しかし、そのそこに流れているのは、「命のつながり」であると思う。クマのフンからキノコが生えるのは、わずかな栄養でもむだにならないから。死んだサケが下流へと流され森に栄養を与えていく。倒木はその上に生えた新しい木に栄養を与える。このような事実を折々の情景描写に交えながら語っている。それぞれの命がつながって助け合っているから、森は豊かであり美しい。このようなテーマは、一学期国語の説明的文章「生き物はつながりの中に」と連動している。

最後に、筆者の表現の工夫について述べる。星野道夫さんの表現は実に巧みである。比喩表現、擬人化、問いかけ表現、擬態語、擬声語など、非常にたくさんの工夫が見られる。また、倒置法や体言止めなどもある。さらに、そのものの実態が何であるかを後の方で述べるという、読者を引きつけておく手法を至る所に使っている。このような表現の工夫は、実は筆者自身の感動をうまく伝えるためになされた物である。それを読み解いていくことが、筆者の感動に共感できる読み方につながっていく物と考えている。

4. 児童 6年生38名

<実態>

当初、「話す聞く」でいくと決めた経緯には、本校の研究との関係以外に、「学習状況調査」の結果があった。5年生(1月)での結果である。それによると、「読む力」は研平均を7.6%も上回っており、書く力は5.5%上回っていた。ところが「聞く力」は県平均を3.5%下回っていたのである。(昨年度一年間、聞くことに力を入れてきたというのは、一体何だったのか…)というように、そんな結果も影響していた。

読む力が高いのは、読書習慣によるところが大きいと思う。高学年になるに従って、図書館の利用状況がめっきり減ってしまうというのが、私が担任してきた子ども達の傾向だったが、この学年の子ども達は、担任の働きかけのなさとは無関係に図書館に足を運ぶ子がいる（決して全員ではないが、数人でもいることが驚き）。教室でも休み時間に読書をする子が何人もいる！本好きな子が多いクラスだというのが担任の印象なのである。

< 森への感想 >

「森へ」は、登場人物もいない、物語でもない、山場もあまりない。自然の様子を描写した紀行文である。だから、子ども達もあまり興味を示さないのではないかと予想した。ところが授業者の予想と反して、実に多様な感想、そして自分の思いを書いていた。本文からテーマ性をとらえていると思われる児童は12人（38人中）。行ってみたい、見てみたいという感想が多いように、森の世界に浸りながら読んでいる様子が伝わってくる初発の感想が多かった。これは、一之宮町という自然に恵まれた地域性や5年生の時に行った「源流探検・位山登山」という体験、さらに5年生の時の「自然環境」の学習経験が大きく影響していると思われる。

5. 研究主題との関わり

仲間と共に学び合う宮の子の育成

～ 受け止め、考え、伝え合う力をつけるために ～

「はじめに」でも述べたが、話し方、聞き方の「習得」ではなく、「習熟」ととらえて臨んでいきたい。サブタイトルの「受け止め」「考える」のは何か。それは教材の中身である。本単元では、読み物教材の特性を生かし、話し聞く活動によって、教材のねらいに迫っていきたい。

自らの考えを明らかにするための支援のあり方

意欲的に追求するための課題のあり方

児童に提示する課題は「第 場面 表現の工夫を見つけ、筆者の感動をさぐろう」である。これはすべての読み取りの授業で共通したものである。このような課題を設定したのは、第一、二場面での学習である。始めに、ある一人の児童の感想文を紹介し、その感想文が表現の工夫に着目している点に注目し、「表現の工夫と筆者の感動」を毎時間の課題とすることにした。

評価の工夫と充実

TTで授業を進めていくため、評価もきめ細かく行えると考えている。具体的には、一人読みの時間に、担当区分を決め、その様子を情報交換し、話し合いに生かしていくこと。また、授業を進めていくT1の横で、目立たない子のがんばりを見つけ授業の最後に評価をしていくという方法も取り入れたい。

伝え合う場の設定のあり方

学び合いを深める教師の支援方法

学び合い深め合いの学習が成立するためには、一人一人の考えを明確にするために支援が

必要になる。本単元では、教科書に傍線を入れたり、ノートには何をどのように書くかを明示したりすることである。また、文章全体を広く考える場面と、一歩つまこんで深く考える場面とを明確にすることが必要になってくると思う。

聞き合い、考え合う場の設定の工夫

授業の流れとしては、場面全体の「一人読み」「全体読み」。深めたい箇所についての「一人読み」「グループ交流」「全体交流」として考えている。「グループ交流」を入れたのは、全体交流だけでは、一言も言葉を発しない子が出てくるからである。1時間のうち、何か一言以上は話させたい（言葉の学習の時間なのだから）、というのが教師としての思いである。